様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　 ５ 月 １７ 日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ１３４２５

研究課題名（和文）ポール・ヴァレリーの初期詩篇についての研究

研究課題名（英文）Study on the Early Poetry of Paul Valery

研究代表者
鳥山　定嗣（TORIYAMA, Teiji）

名古屋大学・人文学研究科・准教授

研究者番号：８０７８３１１７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：未公表作を多く含むヴァレリーの初期詩篇草稿の活字化・翻訳・体系的分類を行うとともに、初期詩篇と後期詩篇の関連性、青年期における友人や先行詩人（特にルイスとマラルメ）との交流という観点から、ヴァレリー初期の詩作の全体像を考察した。その結果、従来ヴァレリーはフランス近代詩の流れに逆行した古典的詩人と評されてきたが、初期の詩作には19世紀末フランス詩の変革運動に通じる革新的な試みが見出されること、後期の代表作『若きパルク』が初期詩篇と秘かに結びついていること、青年期の詩作が友人たちとの親密な相互作用を通して発展したことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究成果の第一の意義は、ヴァレリー初期の詩作が同時代の詩の革新的な動向と軌を一にしていた事実を示すことにより、旧来の詩人像に修正を加え、革新性と伝統性を併せもつヴァレリーの詩の多面性を明らかにした点にある。また初期詩篇と『若きパルク』の関連性を指摘し、詩作復帰を象徴するこの後期詩篇のなかに詩作放棄以前の青年期の記憶が刻まれていることを示した。さらにルイスとの相互作用やマラルメの死が初期の詩作に及ぼした影響という観点から、青年ヴァレリーが親密な他者との関係のなかで創作していたことを示したが、この指摘には、しばしば独我論的と批判される作家像を修正する意義があると思われる。

研究成果の概要（英文）：This study examined Valery’s early poems by transcribing, translating, and classifying their manuscripts, including many unpublished pieces. It also explored the relations between his first poetry and his later works, as well as his interactions with friends and contemporaries in his youth (especially Louys and Mallarme), showing that, contrary to the conventional image of Valery as a classical poet who went against the contemporary current, his early poems include innovative attempts in line with the general movement of French poetry at the end of the 19th century.

研究分野：フランス文学

キーワード：ヴァレリー　生成研究・草稿研究　フランス近代詩　ピエール・ルイス　マラルメ　詩法　韻律　翻訳

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

ポール・ヴァレリー（1871-1945）は『若きパルク』の詩人、『ヴァリエテ』の批評家、『カイエ』の思想家など多様な面をもつ作家であるが、詩人としては、フランス近代詩の変革運動に背を向けた反時代的な古典的詩人という評価が一般的であった。しかし、それは 1917 年に文壇復帰した 40 代以降のヴァレリーの代表的な詩『若きパルク』や『魅惑』の特徴であり、20 代までの初期詩篇（青年期危機を経て詩作を放棄する以前の作）を含めた詩人ヴァレリーの全容を言い当てるものではない。

ヴァレリーの初期詩篇としては、1920 年『旧詩帖』に収められた詩篇（初版は 16 篇、1931 年版以降 21 篇所収）が知られていたが、これは後年ヴァレリーが改変の手を加えた上で公表した詩集であり、実際にヴァレリーが青年期に書いた詩については少数の研究者が言及するにとどまり、同詩集に収められなかった大多数の初期詩篇はほとんど顧みられることのない状況であった。このような研究状況を踏まえ、詩人ヴァレリーの全体像を把握するためには初期の詩作を研究する必要があると考え、ヴァレリーの初期詩篇についての本研究を開始した。

２．研究の目的

本研究の目的は、未公表詩篇を多く含むヴァレリーの「初期詩篇草稿」を発掘・精査することにより、フランス近代詩の流れに逆行した古典的詩人という旧来の詩人像を修正し、ヴァレリーの詩の多面性を示すこと、またそれと同時に、ヴァレリー初期の詩作をフランス近代詩の潮流のなかに位置づけることである。具体的には以下の点を目的とする。

(1) ヴァレリーの初期詩篇草稿の活字化・翻訳・体系的分類をおこない、その全体像を把握する。
(2) ヴァレリーの初期詩篇の特徴および後期詩篇との関連性を明らかにする。
(3) ヴァレリー初期の詩作と 19 世紀末フランス詩の変革運動との関連性を明らかにする。

３．研究の方法

上記 3 点の目的を達成するために、それぞれ次の方法に基づいて研究を進める。

(1) ヴァレリーの「初期詩篇草稿」全 2 巻（フランス国立図書館所蔵、Naf 19001, 19002）の解読・活字化および翻訳の作業を並行して進め、草稿の活字化を終えた段階で、初期詩篇を制作年代・発表形態・形式的特徴という観点から体系的に分類する。
(2) ヴァレリーが初期詩篇を改変して編んだ『旧詩帖』の研究を深めるとともに、初期詩篇を『若きパルク』や『魅惑』といった後期詩篇と比較し、両者の相違と関連性を探る。
(3) 同時代の詩人（特にピエール・ルイスとステファヌ・マラルメ）との交流や、作品を通した先行詩人の受容がヴァレリー初期の詩作に及ぼした影響について考察する一方、フランスの韻律学者ブノワ・ド・コルニュリエが『韻文の理論』において提示したフランス詩の変遷過程に照らして、ヴァレリーの初期詩篇を韻律的観点から分析する。

４．研究成果

(1) ヴァレリーの初期詩篇草稿の活字化・翻訳・体系的分類

ヴァレリーの手稿「初期詩篇 I. 1886-1890」（Naf 19001）には、ヴァレリーが 14 歳から 19 歳までに書いた詩の草稿（全 172 枚）が収められ、ほぼ完成に達したと見られる詩が 156 篇確認された。そのうち、ヴァレリー自身が青年期に公表した詩は 12 篇、詩人の死後、研究者によって公表された詩が 25 篇あり、それ以外の 119 篇は未刊行の詩である。

詩型としては（次頁の表を参照）、ソネ、四行詩、三行詩、六行詩、七行詩、八行詩、詩節をもたない詩に分類され、1889 年までは四行詩が比較的多い一方、1890 年にはソネの割合が急増する。詩句の韻律については（次頁の表を参照）、12 音節詩句が圧倒的に多く、1889-1890 年では 8 割以上を占めている。他方、1888 年に 11 音節詩句と自由詩を、1890 年に 9 音節詩句を試みている点も看過しえない。奇数脚の試みはヴェルレーヌの「詩法」に触発されたものと思われるが、1890 年に出会ったルイスが当時 9 音節詩句を偏愛していたこととも密接な関係があると考えられる。12 音節詩句についても、当初は定型韻律（6-6 のリズム）を遵守しているが、やがて時代の趨勢に従って「多形」なリズムが模索されるようになる。ヴァレリーが伝統的な韻律を脱した非定型の詩句を試みるのは 1889 年末頃からである。

注目すべきことに、ヴァレリーの初期詩篇における定型韻律の解放過程は、『韻文の理論』の著者ブノワ・ド・コルニュリエがマラルメ、ヴェルレーヌ、ランボーの 12 音節詩句を対象として示した韻律自由化の諸段階にかなりの程度合致している。そのことからヴァレリー初期の詩作が同時代のフランス詩の動向と軌を一にしていることが分かる。定型からの脱却は脚韻においても観察され、1889 年の秋には、一篇の詩を女性韻のみで構成したり、押韻をあえて一部欠落させたりしているほか、イギリス式ソネ（四行詩三節と最終二行詩から構成される）の試みなども見られる。このような形式面における探究は、とりわけ本手稿の最後の二年間（1889-1890）に顕著である。

Tableau 1 : forme des poèmes

	sonnet	quatrain	tercet	sizain	septain	huitain	non strophique	total
1886	1							**1**
1887		7		1			1	**9**
1888	2	10	2	5	1	1		**21**
1889	34	48	1	1			2	**86**
1890	30	2	4				3	**39**
total	**67**	**67**	**7**	**7**	**1**	**1**	**6**	**156**

Tableau 2 : mètre des vers

	alexan-drin	octo-syllabe	déca-syllabe	hepta-syllabe	ennéa-syllabe	hendéca syllabe	hétéro-métrique	vers libre	total
1886		1							**1**
1887	5		2				2		**9**
1888	12	1	3			1	3	1	**21**
1889	72	9	3	2					**86**
1890	34	1		1	3				**39**
total	**123**	**12**	**8**	**3**	**3**	**1**	**5**	**1**	**156**

この初期詩篇草稿にはまた、青年ヴァレリーが感化を受けた作家たちの名も散見する。たとえば、ユゴー、ゴーティエ、ボードレール、ヴェルレーヌ、シェイクスピア、ウォルター・スコット、ジョージ・ムーア、エドガー・ポー、ゲーテ、ダンテ、ペトロニウスの詩文がエピグラフに引かれるほか、エレディアやヴェルレーヌに献じられた詩もある。だが、本手稿において最も顕著なのはボードレールに対する情熱であり、1889 年 1 月に購入した『悪の華』の影響が随所に認められる。青年期の情熱はやがてボードレールからマラルメとランボーへと移行し、さらに「ジェノヴァの夜」（1892）に象徴される青年期危機を経て、いわゆる「沈黙期」に入り、『若きパルク』（1917）による復帰まで詩作から遠ざかることになる。その後ヴァレリーは初期詩篇を改変して『旧詩帖』（1920）にまとめるが、本手稿には、ヴァレリー青年期の代表作「ナルシス語る」の最初の素描のほか、『旧詩帖』所収となる詩の初稿が見出される。

以上の成果、ヴァレリーの「初期詩篇 I. 1886-1890」の活字化および翻訳、初期詩篇の体系的分類を含む概要、各詩篇の特記事項に関する注記をまとめ、日本ヴァレリー研究センターの機関誌『ヴァレリー研究』第 9 号に発表した。

(2) ヴァレリーの初期詩篇と後期詩篇の関連

①初期詩篇と『旧詩帖』の関連

ヴァレリーの初期詩篇と後期詩篇の関連として第一に注目されるのは、ヴァレリーが詩作復帰後に出版した詩集『旧詩帖』である。というのも「旧詩＝昔の詩」を集めたと称するこの詩集は実際にはそのとおりではなく、後年それらを書き改めたものであり、〈初期詩篇の改変〉という問題を提起するからである。本研究では『旧詩帖』を初期詩篇の再出版とする表層的な見方と誤った理解を払拭し、初稿から決定稿に至る改変の全過程を跡づけることにより、この詩集をみずからの過去を書きかえ続ける作家ヴァレリーの「詩的自伝」として捉え直した。また『旧詩帖』における古い詩句の改変と新しい詩句の生成のダイナミズムを、同時期に進行していた『若きパルク』や新しい詩集『魅惑』と結びつけることにより、『旧詩帖』の特異性を新旧さまざまな層を内包する〈多層性〉に見出し、それによってこの詩集がヴァレリーの初期詩篇と後期詩篇に橋をわたす重要な役割を担っていると結論づけた。

以上の成果は、本研究の端緒となった 2016 年の博士論文（京都大学）に遡るものであるが、本研究期間中に京都大学博士論文出版助成を受け、同博士論文に大幅な加筆修正を加えるとともに構成を再編した上で、単著『ヴァレリーの『旧詩帖』――初期詩篇の改変から詩的自伝へ』（水声社、2018 年）として刊行した。

②初期詩篇と『若きパルク』の関連

ヴァレリーの初期詩篇は『旧詩帖』と明らかな関連性を示す一方、『若きパルク』とも秘かな連続性を有している。それを端的に示すのは、512 行に及ぶ『若きパルク』のなかに初期詩篇「挿話」の一句が少し形を変えて引用されているという事実である。この事実自体は先行研究ですでに指摘されていたが、それが何を意味するのかという点は論じられてこなかった。問題の一句は「はたして〈時〉は〔……〕鳩たちの好むある夕べを蘇らせてくれるだろうか」（第 186 行）であり、パルクが幼年時代を思い出す回想場面が「夕暮れ」を舞台に描かれている点が注目される。というのも、ヴァレリーは毎日未明に起床して精神の日記「カイエ」を書いた朝の作家というイメージが強いが、それとは裏腹に、青年時代にはむしろ「夕暮れ」を偏愛しており、初期詩篇には夕暮れが頻繁に歌われているからである。「黄昏（誰そ彼）」とも言われる「夕刻」（フランス語でも「犬と狼のあいだ」という表現で両者の見分けがつかなくなる夕刻を指す）は「曖昧さ・両義性」を旨とする象徴主義的美学に通じる一方、詩作回帰を告げる『若きパルク』のなかに「夕暮れ」の回想場面が挿入され、そこに初期詩篇の一句が引用されており、しかもその一句に「夕べを蘇らせる」という表現が認められるという事実は、この初期詩篇の一句の象徴性を物語っている。すなわち、『若きパルク』に引用された「夕暮れ」の一句は、この時刻を愛した青年時代の蘇生を象徴すると同時に、沈黙期を隔てる初期と後期の詩作に橋を渡しているのである。

以上の成果を日本フランス語フランス文学会の学会誌に論文として発表した（« Le souvenir d'"un soir" dans la poésie valéryenne : des vers anciens à *La Jeune Parque* », *Études de Langue et Littérature Françaises*, nº 110-111, 2017, p. 37-53）。

（3）同時代の詩人との関係

①ピエール・ルイスとの相互作用

ヴァレリーが十八歳の夏に出会った友人ピエール・ルイスが彼を文学の道に導いたことは、ヴァレリー自身の証言や先行研究によって知られているが、従来、ルイスが果たした役割は友情に満ちた仲介者の役割（雑誌『ラ・コンク』の編集長としてヴァレリーに詩を発表する場を与えたり、彼をジッドやマラルメに引き合わせ、エレディアやレニエの詩を教えたりしたこと）に限定されており、ルイス自身の詩作についてはほとんど言及されることがなかった。だが、両者は手紙を交わし始めると同時に互いの詩を送り、賞賛と批判を交わしあっており、ルイスが果たした役割の重要性は、この詩作を通した相互作用にこそ認められる。たとえば、1891 年『ラ・コンク』誌に掲載されたヴァレリーの初期詩篇「ナルシス語る」や「不確かな乙女」には、同誌にルイスが実名と匿名を使い分けて発表した詩「偶像の上の夜」「牧人」「花々は旋回する水の上に」との呼応関係が認められ、二人が互いの作に触発されつつ創作していたことが分かる。しかも、こうした詩作における相互作用は青年期にとどまらず、ヴァレリーが後年「ナルシス語る」を改変する過程においてもルイスの詩「牧人」への目配せが見出される。

ヴァレリーとルイスの詩をめぐる交流が最も頻繁となるのは、『ラ・コンク』誌の時代（1890-92）と『若きパルク』制作の終盤期（1916-17）である。ヴァレリーは『若きパルク』によって詩作に回帰するが、奇しくも同じ頃、ルイスも『詩論』や『死の宵祭り』など詩の理論と実践に専心しており、両者は再び制作中の詩を送りあい率直な批評を交わした。実際、『若きパルク』の随所にルイスとの関連が見出される。エピグラフに掲げられた詩句や、『ラ・コンク』誌を想起させる一句「どんな法螺貝（コンク）が繰り返し私の失った名を呼んだのか」をはじめ、〈死への希求〉と〈春のエロス的生命〉がせめぎあう第九断章に、ルイスとの詩のやりとりの反映が読み取れる。さらに、ヴァレリーはルイスの死後、彼に秘かなオマージュを捧げたと思われる。第 331 行の「山並みの棘」（1917 年）という語句は「生まれつつある大地」（1921 年）を経て「光と石（ピエール）からなる線」（1927 年）に改変されるが、この一句に亡き友の名（ピエール）を刻むことにより、ヴァレリーは 1925 年に逝去した友にオマージュを捧げたと解釈できる。

以上の成果のうち、「ナルシス語る」については、日本フランス語フランス文学会の完全仏語誌に論文として発表した（« Valéry et Louÿs : "Narcisse parle" à "Chrysis" », *LITTERA*, nº 3, 2018, p. 120-131）。また、『若きパルク』をめぐる両者の相互作用については、2017 年 9 月 22-24 日に南仏セット市立ヴァレリー記念館で催された国際シンポジウムにて口頭発表し、共著論文として発表した（« Paul Valéry et Pierre Louÿs : un dialogue autour de *La Jeune Parque* », in *Paul Valéry et les écrivains*, Fata Morgana, 2018, p. 165-192）。「ヴァレリーとルイス――『若きパルク』に秘められた友情」（『ヴァレリーにおける詩と芸術』、p. 83-99）はそれを元にした日本語論文である。

②ステファヌ・マラルメの死

1892 年の「ジェノヴァの夜」と並び、青年期のヴァレリーを不意に襲ったもう一つ大きな「危機」は 1898 年のマラルメの死であった。当時 26 歳のヴァレリーは「喪の作業」というべき詩句を素描する――通称「マラルメの墓」草稿（「初期詩篇草稿」第 2 巻所収）――が、完成稿にはほど遠い状態で中断する。その後、初期詩篇に手を入れるかたわら『若きパルク』に着手した詩人は、十数年前に中断した「マラルメの墓」に再び向き合い、同草稿に由来する詩句を『若きパルク』に挿入した。以上は周知のことであり、「マラルメの墓」草稿と『若きパルク』の関連についてもすでに指摘されているが、この点を再び問い直すのは次の二つの理由による。第一に、従来「マラルメの墓」草稿は『若きパルク』との関連で読まれてきたが、同草稿にはそれ以外の側面（1897 年ヴァレリーがマラルメに贈った詩「ヴァルヴァン」との関連）も認められること。第二に、『若きパルク』には「マラルメの墓」に由来する詩句だけでなく、マラルメの諸作品との関連や、「マラルメの名の撒種」というべき現象も見出されること。ヴァレリーは「父なる友」として敬慕した存在の死にどのように向き合い、言葉にならない「喪の作業」を言語表現を通してどのようにおこなったのか――この問いをめぐり、先行研究の指摘を踏まえつつ、「マラルメの墓」草稿と『若きパルク』について新たな考察を試みた。

「マラルメの墓」草稿に由来する詩句（「崩れそうな……藻の混じる大地よ、私を運べ」）を含む『若きパルク』第一部終盤はパルクが死に瀕する場面だが、そこにはマラルメの作品（「エロディアード」「海の微風」「苦悩」「賽の一振り」）に関連する語彙・イメージや、マラルメの死因となった「咽喉痙攣」を想起させる表現がちりばめられている。また『若きパルク』の草稿にも「マラルメの墓」に通じるイメージが見出され、十数年前に中断された「喪の作業」が再び試みられたことが窺われる。さらに「マラルメの名の撒種」という現象が注目される。清水徹が指摘した箇所（『若きパルク』初期草稿の語句「どのような死者を見たのか queL MoRt vu dans un songe oublié」と決定稿の第 28 行「それとも閉ざされた夢から胸苦しさが私を追うのか ou si Le MAL Me suit d'un songe referMÉ」）以外にも、同様の現象が『若きパルク』第 318 行に見出された。「砕け散る波の刃に、櫂が入り混じり MÉLange de LA LAME en Ruine, Et de RAME」――lame（波の

刃）と rame（櫂）が音声上まさに入り混じる詩句――に MALLARMÉ の名を構成する音素が響くのである。ヴァレリーがどこまで意識的であったかは憶測の域を出ないが、単なる偶然と思えないのは、この詩句が『若きパルク』の生成過程の最初期に遡るとともに、「マラルメの墓」草稿に由来する詩句を含む第一部終盤に見出されるからである。要するに、ヴァレリーの詩作復帰を告げる『若きパルク』は「マラルメの墓」草稿で中断された「喪の作業」を引き継ぐものであり、特に第一部終盤、すなわち深夜の入水自殺から夜明けの蘇生へというこの詩の最大の転機をなす場面に、マラルメの記憶がさまざまなかたちで刻み込まれているのである。

以上の成果のうち、「マラルメの墓」草稿から『若きパルク』にいたる「詩作における喪の作業」については、2018 年 9 月 7-9 日、慶応義塾大学で催されたシンポジウムにて、「マラルメを弔うヴァレリー ――『若きパルク』再読」と題する口頭発表をおこない、それに基づく論文を執筆した（論文集として水声社から刊行予定）。また、「マラルメの名」にまつわる含意について、九州大学仏語仏文紀要『ステラ』に「マラルメの名をめぐって」と題する論文を発表した。

(4) ヴァレリーと翻訳

また、研究開始当初は予期していなかったが、ヴァレリーの初期詩篇の研究を進める過程で「翻訳」というテーマが浮かび上がってきた。「初期詩篇草稿」第 2 巻に収められたダンテ・ゲイブリエル・ロセッティの詩の翻訳をはじめ、ヴァレリーは英語（ロセッティ、トマス・ハーディ、エドガー・ポー）、イタリア語（ペトラルカ）、プロヴァンス語（テオドール・オーバネル）、ラテン語（ウェルギリウス）等、さまざまな言語の詩を翻訳しており、数こそ多くはないが、青年期から晩年にいたるまで詩の翻訳に携わった。なかでもウェルギリウス『牧歌』のフランス語訳に序文として添えられた「『牧歌』についての変奏」はヴァレリーの詩論・翻訳論として注目される。ヴァレリーは「翻訳」を「ある原因から生じる効果の近似値を別の原因を用いて再構成すること」と定義し、「効果の詩学」を翻訳の次元に導入するが、この点に詩の制作と翻訳との接点が見出される。また、異なる言語間でなされる「いわゆる翻訳」だけでなく、未だ言語にならない内的事象を言語化する行為をも「一種の翻訳」とみなし、書く行為全般を「広義の翻訳」と捉える視点もヴァレリーの翻訳論の際立った特徴である。ヴァレリーにおいて翻訳論は詩学＝制作学（ポイエティック）に結びつくのである。

〈翻訳〉はまたヴァレリー自身の〈創作〉とも密接な関係がある。ウェルギリウス『牧歌』の翻訳と同時期に、ヴァレリーはこれに触発された作品『樹についての対話』を書いており、両作品には、登場人物の同一性、主題的な連関、作品の構成など、さまざまな関連性が見出される。なかでも注目されるのは形式上の接点である。つまり、ヴァレリーは『牧歌』翻訳にあたり、ラテン詩の韻律（ヘクサメトロス）をフランス詩の韻律（無韻のアレクサンドラン）に移し替えたが、他方『樹についての対話』においても、一見散文で書かれているように見えるが、実際にはその大部分が無韻のアレクサンドランで構成されているのである。さらに手稿を分析することで、散文のなかに隠された韻文のリズムが、偶発的あるいは自然発生的な産物ではなく、一連の手直しによって精巧に作られていることが判明する。作品の最後で、ティテュルスは対話者のルクレティウスを「言葉の樹」と形容するが、『樹についての対話』という作品自体を、いわばフランス詩の伝統的韻律で織りなされた「言葉の樹」とみなすことができる。

以上の成果のうち、ヴァレリーの翻訳論（ベンヤミンやヤコブソンの翻訳論との比較検討）については、2019 年 3 月 15-17 日、京都工芸繊維大学で催されたシンポジウムにて、« Valéry et la traduction : Comment traduire la poésie ? Qu’est-ce que traduire ? » /「ヴァレリーと翻訳――詩をいかに訳すか、翻訳するとはいかなる行為か」と題する口頭発表をフランス語・日本語の両言語でおこない、それに基づく論文を日仏両言語で執筆した（論文集として Peter Lang 社から刊行予定）。また、ヴァレリーによるウェルギリウス『牧歌』の韻文訳と『樹についての対話』の関連性については、「ウェルギリウスを変奏するヴァレリー ――『牧歌』翻訳から『樹についての対話』創作へ」および「ヴァレリー『樹についての対話』における形式と主題――ウェルギリウス『牧歌』の翻訳から変奏へ」と題する論文をそれぞれ『コレスポンダンス　北村卓教授・岩根久教授・和田章男教授退職記念論文集』（2020 年、477-489 頁）および『名古屋大学人文学研究論集』（2020 年、125-141 頁）に発表した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計10件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　10件）

１．著者名 Teiji TORIYAMA	４．巻 9
２．論文標題 Paul Valery, Vers anciens I. 1886-1890 (Manuscrits de la BNF, Naf 19001, 172 ff.) : transcription et traduction japonaise	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Valery Kenkyu : Bulletin Japonais d'Etudes Valeryennes	６．最初と最後の頁 5-191
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 鳥山定嗣	４．巻 9
２．論文標題 ヴァレリーの手稿『初期詩篇 I. 1886-1890』の翻訳	５．発行年 2021年
３．雑誌名 ヴァレリー研究	６．最初と最後の頁 192-338
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 鳥山定嗣	４．巻 39
２．論文標題 ジャン=リュック・ナンシーの『若きカルプ』――ヴァレリー詩のパロディ	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Stella（九州大学フランス語フランス文学研究会）	６．最初と最後の頁 221-237
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15017/4355462	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 鳥山定嗣	４．巻 3
２．論文標題 ヴァレリー『樹についての対話』における形式と主題――ウェルギリウス『牧歌』の翻訳から変奏へ	５．発行年 2020年
３．雑誌名 名古屋大学人文学研究論集	６．最初と最後の頁 125-141
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18999/jouhunu.3.125	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Teiji TORIYAMA	4．巻 3
2．論文標題 Valery et Louys : “Narcisse parle” a “Chrysis”	5．発行年 2018年
3．雑誌名 LITTERA (Societe Japonaise de Langue et Litterature Francaises)	6．最初と最後の頁 120-131
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20634/littera.3.0_120	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 鳥山定嗣	4．巻 37
2．論文標題 マラルメの名をめぐって	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Stella（九州大学フランス語フランス文学研究会）	6．最初と最後の頁 149-166
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15017/2203047	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Teiji TORIYAMA	4．巻 110
2．論文標題 Le souvenir d’“un soir” dans la poesie valeryenne : des vers anciens a La Jeune Parque	5．発行年 2017年
3．雑誌名 Etudes de Langue et Litterature Francaises (Societe Japonaise de Langue et Litterature Francaises)	6．最初と最後の頁 37-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20634/ellf.110.0_37	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 鳥山定嗣	4．巻 36
2．論文標題 ヴァレリーの詩集『旧詩帖』の題名と構成	5．発行年 2017年
3．雑誌名 Stella（九州大学フランス語フランス文学研究会）	6．最初と最後の頁 165-182
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15017/1906135	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 鳥山定嗣	4．巻 48
2．論文標題 読者としての詩論――ヴァレリー「詩のアマチュア」	5．発行年 2017年
3．雑誌名 仏文研究（京都大学フランス語学フランス文学研究会）	6．最初と最後の頁 85-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14989/228183	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 鳥山定嗣	4．巻 7
2．論文標題 ジッド・ルイス・ヴァレリーの青年期の交流――邦訳『三声書簡1888-1890』の書評に代えて	5．発行年 2017年
3．雑誌名 ヴァレリー研究（日本ヴァレリー研究センター）	6．最初と最後の頁 58-88，118-120
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　1件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 鳥山定嗣
2．発表標題 マラルメを弔うヴァレリー：『若きパルク』再読
3．学会等名 マラルメ・シンポジウム（2018年9月7-9日，於 慶應義塾大学）
4．発表年 2018年

1．発表者名 Teiji TORIYAMA / 鳥山定嗣
2．発表標題 Valery et la traduction : Comment traduire la poesie ? Qu ’ est-ce que traduire ? / ヴァレリーと翻訳――詩をどう訳すか、翻訳するとはいかなる行為か
3．学会等名 Quatriemes journees d ’ etudes franco-japonaises en traductologie / 「日仏翻訳学研究」第4回研究会（2019年3月15-17日，於 京都工芸繊維大学）（国際学会）
4．発表年 2019年

１．発表者名 Teiji TORIYAMA
２．発表標題 Valery et Louys : clins d'oeil amicaux dans leurs poemes
３．学会等名 Les Journees Paul Valery (“Paul Valery et les ecrivains”)（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計5件

１．著者名 小川美登里、鳥山定嗣、鈴木和彦（共訳）	４．発行年 2020年
２．出版社 幻戯書房	５．総ページ数 232
３．書名 クリスチャン・ドゥメ『三つの庵　ソロー、パティニール、芭蕉』	

１．著者名 北村卓教授・岩根久教授・和田章男教授退職記念事業会編（鳥山定嗣、分担執筆）	４．発行年 2020年
２．出版社 朝日出版社	５．総ページ数 803（477-489）
３．書名 コレスポンダンス 北村卓教授・岩根久教授・和田章男教授退職記念論文集（「ウェルギリウスを変奏するヴァレリー ――『牧歌』翻訳から『樹についての対話』創作」）	

１．著者名 三浦信孝・塚本昌則編（鳥山定嗣、分担執筆）	４．発行年 2018年
２．出版社 水声社	５．総ページ数 352（112-130）
３．書名 ヴァレリーにおける詩と芸術（「ヴァレリーとルイス――『若きパルク』に秘められた友情」）	

１．著者名 Michel Jarrety, Franck Lestringant, Daniel Leuwers, Bertrand Marchal, Juan Carlos Mestre, Kolja Micevic, Annie Salager, Antonietta Sanna, John Taylor, Teiji Toriyama, Maithe Valles-Bled	４．発行年 2018年
２．出版社 Editions Fata Morgana	５．総ページ数 200（165-192）
３．書名 Paul Valery et les ecrivains (“Paul Valery et Pierre Louys : un dialogue autour de La Jeune Parque”)	

１．著者名 鳥山定嗣	４．発行年 2018年
２．出版社 水声社	５．総ページ数 532
３．書名 ヴァレリーの『旧詩帖』――初期詩篇の改変から詩的自伝へ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関